

評伝 矢内原忠雄(八)

A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 8)

関口 安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第八章 時代の重圧に抗して

一 『帝国主義下の台湾』の刊行

東京帝国大学教授としての矢内原忠雄は、教育と研究で忙しい日々を送るようになる。彼は教育と研究を分離したものとは考えなかった。すぐれた教育をするには、よい研究が伴わなくてはならないと考えていた。それゆえ彼は研究と教育が乖離しないよう、授業の準備に全力を注いだ。留学から帰国し、はじめて授業に臨んだ時には、留学時に得たことを努めて話題にした。美濃部亮吉が授業で聞いたという「アイルランドのはなし」¹⁾など、その早い時期の例

である。再婚間もない時期の一九二四(大正一三)年秋の朝鮮・満洲旅行の朝鮮にかかわる成果は、経済学部の授業で取り上げ、「朝鮮産米増殖計画に就て」(農業経済研究一九二六・三)と「朝鮮統治の方針」(中央公論一九二六・六)の二つの論文に書き、『植民政策の新基調』(弘文堂一九二七・二)に収録していることはすでに述べた。また、統計を駆使した『人口問題』(岩波書店、一九二八・二)という労作も生まれる。

単行本『帝国主義下の台湾』は、一九二九(昭和四)年十月十日、岩波書店から刊行された。前章で詳しく述べたように、矢内原忠雄は二年前の一九二七(昭和二)年三月十八日から五月六日まで、台湾調査旅行を行っていたが、本書はその収穫であった。彼の学問は、直感を重んじながら現地調査によって論を構築するという、実証を重視するところにある。

現地調査は彼の学問の中核であり、外すことはできない。それゆえ必要とあれば、再婚したばかりの妻恵子を日本に置いて、朝鮮や満洲に出かけ、徹底的調査をあえて行ったのであった。四十日にもおよぶ台湾の現地調査旅行では、中央高地と澎湖列島などの島嶼を除いた地には、ほとんど行っている。台北を中心とした北部、台中を中心とした中西部、高雄と台南エリアの南部、そして太魯閣峡谷をメインとする東部とよくぞ回ったものである。鉄道のないところにも足を延ばしている。まだ三代半ばで、健康に恵まれていたからこそ出来たのであろう。とにかく標的とした台湾を調べるのに、一週間程度の視察旅行では済ませず、徹底した現地調査を四十日程かけて行ったのである。その努力たるや尋常でない。

矢内原忠雄の台湾視察旅行は、当時台湾の植民地統治を担当した拓務省や台湾総督府の引いたレールには乗らず、蔡培火や葉榮鐘という台湾の民間人に頼って行った。二人とも忠雄の研究調査に誠実に、心からのもてなしをもって助力した。むろん総督府には顔を出し、資料を得るといふこともしているが、その旅程はあくまで上からの視察というようなものでなく、純粹な研究を第一とした調査旅行であった。忠雄自身のことばで言わせるなら、「昭和二年に台湾にいったのですが、行くときに、台湾総督府へいきなりいかなかったし、拓務省の紹介ももらわなかった。台湾人の知り合いがありまして、それで行ったのです。ですから私が、台湾にきたということ、行ってから初めて台湾総督府の人がしつたようなわけです」ということになる。

一九二七（昭和二）年五月六日に帰宅した彼は、すぐ旅のまとめと整理にとりかかる。彼は感興の湧き上がるまま、身近な『帝国大

学新聞』に旅の感想、「台湾に於ける政治的自由」を書いて送った。それは五月二十三日付の同新聞、第二一〇号に載った。現在は『矢内原忠雄全集』第二十三巻に収録されているので、新聞の復刻版を採すまでもなく読める。これは率直な台湾印象記である。はじめの部分を下に引用する。

私は三月末より四月末にかけ約四十日間台湾を旅行して来た。

台湾の事情は多く内地に知られて居ない。朝鮮ほど知られて居ない。そして台湾在住者はそのことを極めて遺憾とし、台湾紹介に努めて居られる。台湾は今日でも生蕃が、餓首にやつて来たり、マラリヤが多かつたりして住むに堪へない処のやうに思はれて居るが、来て見れば案外いいせうと、度々そんな話が出た。事実、台湾の生活における生命財産健康の安全さは東京などより遙かに良いであらう。気候風土よりいつても誠に住み心地の好い土地である。台湾は浦島太郎の渡つた龍宮だといふ考証があるさうだが、全く台湾は龍宮だ、殊に官吏及び前官吏の龍宮城だ。

併しながら知られざる台湾はこんな方面のみではない。その政治的関係は気候風土以上に知られて居ない。行つて見て驚くことは気候風土の案外良いことよりも政治的関係の想像以上に專制的なことである。台湾にすべてのものはある、ただ政治上の自由を欠く。田総督の時にスタートせられし総督府評議会はその後全く開かれず、洲及び街庄の協議会は毎年開かれては居るが甚だしく不徹底なものである。協議会員は政府の任命によ

るのであるが、中には日本語を解せざる者も任命されて居るさうだ。(会議の用語は日本語である)。且つ議案の配布は会議開催の僅々二、三日前のことが多いといふ。これが大正九年に地方自治への準備として設けられし協議会制度の現在における運用の状態であるのだ。

総督府の政治に対する批評は最も嫌忌^{けんき}せられて居る。台湾には内地人の発行する日刊新聞が西部に四つ、東部に一つあるが、いづれも御用新聞の名に背かない。本島人の発行する新聞は一つもない。本島人の新聞としては東京で発行せられて居る週刊の『台湾民報』あるのみ、その発行所を台湾に移転することは今以て許可せられないのである。台湾には言論の自由がないのみならず、言論の機関もない。台湾人は言論機関を許されて居ない。彼等は口のない民衆だ。昔フランスで「ルイ十四世の政治を知らんと欲するものは西印度諸島に赴くべし」といはれたが、昭和の今日専制政治の何たるかを見んと欲する学徒は台湾へ行つてみるべし。

これは当時の日本政府の台湾統治への痛烈な批判の文章である。彼は台湾で葉榮鐘と共に台湾民族運動の指導者林獻堂と会つて居る。そして林獻堂の伝言をもつて、当時竹林事件として日本でも話題となった事件の現地、竹山^{ツクヤマ}まで葉榮鐘と行つて、取材をしていた。竹山は鉄道も通つていない山中の町である。台中からは五時間ほどかかった。

矢内原忠雄は現地取材を研究の大事な要素として考えていた。研究者としての直観を重視した彼は、総督府の出している資料や解説

を鵜呑みにせず、自ら現地を歩き、資料を求め、実状を把握したのであった。それだけに、その文章には現実感^{リアリティ}が漂う。右に引用した箇所からだけでも、そのことは言えるのである。なお、竹林事件に関しては、『帝国主義下の台湾』の「第二章 台湾の資本主義化」に詳しい。

次に彼は、一九二七(昭和二)年秋からの東大経済学部での講義において、台湾への旅の収穫を披露する。これも彼のことばを借りるなら、「視察した結果を、学問的、科学的に整理して、台湾問題についての講義をしたのです」ということになる。当時、台湾から東京に来ていた葉榮鐘は、忠雄の勧めで忠雄の東大での講義に出席したが、その感想を「矢内原先生と台湾」に以下のように書く。

定刻の約二十分前に二十九番教室に着いたが、聴講満員の状態で辛うじて後から第二列目に座席を占めることが出来た。先生のお許しを得たとは言うものの、私は生来気が弱く、大勢の東大生、言わば天下の秀才の群集している中に独りポツリ入り込んでいることがややもすれば自卑感に襲われて気遅れ勝ちであるが、幸いに東大医学部在学中の高天成君を発見して、知人の居ることに気を強くし、同時に聴講者の中には経済学部以外の学部からも多数来ていることを知って、異端者はあながち自分のみではないと言う同類意識も手伝つて、ようやく心の落着きを取返したのであった。先生の名著『帝国主義下の台湾』は既に前学期に講義済みであり、当日はその第二篇にあたる「台湾糖業帝国主義」であつてしかも第二回目の講義であつた。御講義は大変調子が良く、熱弁にて台湾土地政策の沿革を述べら

れ、劉銘伝（清朝の台湾巡撫で稀れに見る有能な支那官吏）の土地政策を紹介して黒板に「清丈賦課」の四字を大きく白墨で書かれた。そしてあれ丈複雑な内容を持った土地政策を只四字に纏め、しかも一目瞭然にその内容を余すところなく表現しているのはさすがに文字の国であると感じなされたことは今でも尚印象に鮮やかである。その後毎週先生の講座に列するのが私にとつてこの上ない楽しみであり且つ誇りでもあったのである。

新進教授矢内原忠雄の講義は人気があつた。葉栄鐘の右の回想文にもあるように、受講生は経済学部 of 学生に留まらず、「他の学部からも多数来ている」こともあつて、座席は満員である。その授業は机上の空論でも、統計類みの数字転がしでもない。現地調査というバックグラウンドがあり、それに基づいてのもので、リアリティーと説得力とに満ちていた。また、先にも指摘したところだが、三十代半ばの矢内原忠雄は、おむね健康に恵まれ、滑舌・声量とも申し分なかつた。

大学での授業は、どんなに内容がよくとも、声が小さいとか、発音・イントネーションが不明確のため、聴き難いようでは講義として失格である。が、彼は神戸一中時代から人前で話すことが多く、一高弁論部では発声法なども学んでいた。そして人を説得する話法も自然心得ていたようだ。その成果が大学教授となつて、若い学生を前にして發揮される。内容の豊かな授業が、明快な日本語で、しかもツボを心得た生きのいい語り口で語られるのであるから、多くの学生が魅せられたわけである。彼は早くも東京帝国大学経済学部の花形教授となつていたのである。

さて、「帝国主義下の台湾」と題した書物は、第一篇に当たる部分を東大法学部の研究誌『国家学会雑誌』の一九二八（昭和三）年五月号から九月号まで五回に亘つて連載し、第二篇にあたる部分は『経済学論集』第七卷第一号に「台湾糖業帝国主義」として載せ、それを一本として刊行したのである。これは現在『矢内原忠雄全集』第二巻で、容易にその全貌にふれることができる。また、その第一篇のみを収録し、現代表記によるテキストとして編集した若林正丈^{まさひら}編『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』^⑤もある。

『帝国主義下の台湾』の第一篇は、「第一章 台湾の領有」にはじまり、「第二章 台湾の資本主義化」「第三章 教育問題」「第四章 政治問題」「第五章 民族問題」とその構成は、間然するところがない。特に「第二章 台湾の資本主義化」は、節と項を立てての論述で圧巻である。質量共に全五章中、群を抜く。第二篇は、「第一章 糖業と植民地」にはじまり、「第二章 台湾糖業の奨励」「第三章 台湾糖業の資本主義的発展」「第四章 台湾糖業の将来」までの全四章構成、台湾糖業発展史を経済的帝国主義の姿ととらえている。一、二篇とも章・節・項には入念に注が添えられ、巻末には詳細な索引が付く。注は当然のことながら、索引をしつかり付けているのは、ヨーロッパでの研修中、大英博物館の読書室などで、多くの現地の書物に接したことから来るのであろう。

ちなみに言えば、二十一世紀の今日に及んでも、日本では学術書に索引のない書物が大手を振つてまかり通つている。索引が付くことで、書物ははじめて立体化し、威力を發揮するものであることを知らない著者や出版社が、日本には依然多い。いや、そう言うよりも、索引をつける労を惜しむと言つた方がよいだろうか。が、ヨーロッパ

本の書籍に接していた矢内原忠雄の書物は、初の研究書『植民及び
植民政策』にも、入念な索引を添えているので、利用しやすい。また、
章・節・項に小見出しを添え、文章はよくこなれていて難解さはない。
なお、右に紹介した若林正文編『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」
精読』は、著者矢内原忠雄の注に続いて、「編者注」を新たに添え
ており、今日の時点で読むには大変役立つ。「精読」の真骨頂である。

中村勝己「矢内原忠雄と経済学」は、『帝国主義下の台湾』を採
りあげ、時代背景に入念に目を凝らしながら、日本支配下における
台湾の土地改良や糖業の問題点に言及する。その上で矢内原忠雄の
主張である、一方的収奪を排し、台湾の人々の政治的権利にも応ず
るべきであるという本書の内容をかいつまんで紹介しており参考にな
る。

『帝国主義下の台湾』は、現地で得た歴大な資料と、現地を隈無
く回って農場や工場を見学し、現地人からも取材した成果であった。
台北では総督府地方課で米・水利事業・金融などの資料調査、台中
では帝国製糖・台湾青果会社などを訪問し、竹林事件の竹山まで足
を延ばして調査をする。鳳山、屏東、花蓮、台東でも製糖工場を視
察するが、そうした現地調査の成果は、本巻一卷に十分反映されて
いる。本書は『植民及植民政策』と並んで、矢内原忠雄初期のすぐ
れた研究業績として位置づけられるものなのである。「第一章 台
湾の領有」からはじまる叙述は格調高く、文献調査と事実調査（現
地研究調査）が相俟って、見事なハーモニーを奏する。しかも、あえ
ていうなら、本書は当時の日本政府の台湾植民政策への手厳しい批
判の書であった。それは国家至上主義への〈謀叛〉に重なる。

それゆえ名著ながら『帝国主義下の台湾』は、刊行後、台湾への

移入が禁止された。著者矢内原忠雄が最も読んで貰いたいと願って
いた台湾の人々（支配者・被支配者を問わず）が、読めない状況が、第
二次世界大戦の終了時まで続いたのである。「矢内原忠雄全集」第
二巻の「編集後記」には、「日本領有時代には台湾へは本書の移入
は禁止されたが、中国語訳三種のほかロシア語訳がある。中国語訳
のうち著者の蔵書の中に発見されたのは陳茂源訳『日本帝国主義下
之台湾』の一種のみで、これは中華民国四十一（一九五二）年台湾
省文献委員会出版となっている。その他の中国語訳は楊開渠氏およ
び周憲文氏によるもので、それぞれ一九三〇年神州国光社および
台湾銀行から出版されたものである。ロシア語訳は大塚金之助氏に
よってとりよせられたとのことであるが、日本税関の押収するところ
となつた模様である（通信 三八号参照）。著者が生前語つたところ
によれば、ロシア語訳はアメリカ議会図書館に所蔵されているよ
うである」と記されている。

『帝国主義下の台湾』は、第二次世界大戦後四十年以上を経た
一九八八（昭和六三）年六月、隅谷三喜男の入念な「解説」付で、
岩波書店から再刊された。隅谷はこの「解説」の最後で、「『帝国主
義下の台湾』は、日本の社会科学の一つの古典であり、記念碑であ
り、今日でも台湾経済分析の礎石である。台湾問題が日本において
も再び大きな問題となろうとしている昨今、台湾に対して歴史的に
責任のある日本人として、台湾の人々の命運に深い関心を寄せると
ともに、植民地時代と様相を一変して急速な発展を見つつあるアジ
ア・ニックスの一翼としての台湾を客観的に考察する視野を持たな
ければならない。それこそが本書が我々に託そうとする願いであら
う」と記している。

本書以後、矢内原忠雄は、内務省による著書への干渉、——検閲や発売禁止によって、表現の自由を奪われることが多くなる。それは近代日本の知識人の多くが蒙らねばならなかった問題でもあった。彼はそれと闘う。闘いは彼の場合、かつての一高南寮十番の間であつた京大事件の恒藤恭同様、職を賭けてのものとなっていく。そのことは追ひ追ひ明らかにしていくところでもある。矢内原忠雄の以後の歩みは、国家権力が一方的に迫る激しい検閲や発売禁止との闘いといつてもよいのである。この時期、——大正後期から昭和前期にかけての矢内原忠雄の奮闘、精励^{かっせん}恪勤^{かくしん}のさまとその意義を、同僚だつた大内兵衛は、回想「赤い落日——矢内原忠雄君の一生」に詳しく書いている。

二 恩師内村鑑三の死

一九二八(昭和三)年の夏休みを利用して、矢内原忠雄は今度は樺太^{クリ}の調査旅行に出向く。往きと帰りには、北海道各地をめぐる旅となつた。夏休みを利用したのは、休講を避けるのが第一の理由である。八月五日上野を発ち、函館を経、札幌へ。八日は札幌から稚内へ。そして連絡船で九日、大泊に着く。その日は樺太庁や物産陳列館や王子パルプ工場などを視察。その後知取・敷香・真縫・真岡などをめぐり、十八日豊原着。全集収録の「年譜」によると、その夜は、「植民政策上より見たる台湾と樺太」の題で講演をしたとあるが、会場や主催者などの記入はない。翌十九日は、大泊の本願寺別館で「人口問題」の講演をしている。北海道の稚内に戻るのには、

二十日であつた。忠雄は植民政策の研究のため、樺太まで出かけ、それなりの取材をしているが、「樺太は小さいから、勉強はしてきただけども、本にはならなかつた」と本人が言うように、著書にはなっていない。

樺太視察旅行で彼が見たものは何か。帰国後、すぐに書き、黒崎幸吉主幹の雑誌『永遠の生命』に載せた「カルメルは枯る」に、旅の印象が記されているので引用する。

私はこの夏樺太に旅行した。而して鬱蒼たる原始林的密林を以て被はれて居たる地も、今や文字通り枯木の地と化したるもの多きを見た。その第一の原因は大正八年より十二年まで五ヶ年に亘りて猖獗^{しょうけつ}を極めし松毛虫の蝕害にして、被害面積二十二万町歩、これが為め枯損に歸したる材積八千八百四十五万石、世界森林史上空前の大被害といふことである。松毛虫の松葉を食ふ音は近隣の人家にボリ／＼と響き、又鉄道線路の上に落ち重なりたる松毛虫の脂肪のために列車の車輪が空転したと言はれる。実に怖るべき松毛虫の大発生大襲来であつた。モーセの時代エジプトに襲来したる蝗の話を実史なりと信ぜしむるに足るが如き事実であつた。

樺太の山の枯る、第二の原因は年々の山火事である。毎年延長数里に及ぶ山火事数箇所に続発し地方一帯火の海と化する事は珍しくない。現に私も既に二週間燃え続け延焼面積三千五百町歩に達したりといふ山火事の、尚盛に燃え続けつゝ、あるを目撃したのであつた。

山の枯る、第三の原因は濫伐^{らんぱく}である。樺太の木材は、製紙原

料として毎年盛に伐採せられつゝある。今日の状勢にして継続せんか、今後卅年にして樺太の山林は坊主になるだらうと称せられる。

かくて樺太の山は枯れつゝある。その惨しき光景と惨しき予想とに私は眼を伏せざるを得なかつた。この荒廢の眞の原因は何であらうか。私は眼を挙げて周囲を顧た。見よ、イギリスに三の罪あり四の罪あればエホバは之を罰して赦さじ。アメリカに三の罪あり四の罪あれば……。フランスにも、イタリヤにも。而してわが日本にも三の罪あり四の罪あればエホバは之を罰して赦し給はない。樺太の山林は国民の罪の故に枯れるのである。

タイトルの「カルメルは枯る」の「カルメル」とは、パレスチナ北部の丘陵の名で、地中海に突き出た緑深い沃野である。旧約聖書「アモス書」一章の二節に出てくる。そこには「羊飼いの牧草地は乾き／カルメルの頂は枯れる」(新共同訳による)とある。人間の罪のゆえに、緑樹の山が枯木の山となるのをアモスが預言したのである。矢内原忠雄は右の文章に続く箇所で、「目下の不健全なる、焦燥不安なる、物質主義の横行しつゝある世にありて、わが基督教は新しき出発を必要としつゝある。それは思想善導のお先棒となることではない。却て思想善導の偽善を暴露することにある。搾取者を弁護することではない。搾取を責むることである。不義を不義と明白なる言葉を以て言ひ、わが国民の公義を立て、神に帰るべきことを訴ふべきである。人工を棄て、正直となれ。芝居を棄て、素面となれ。冷淡を棄て、誠実となれ。国民の不義についての無関心を棄て、神の公義の爲めに熱心なれ」と言う。

矢内原忠雄は、現地調査によつて樺太植民の眞実を見抜いていた。矢内原伊作はこの箇所を引いて、「昭和三年に書かれたこの文章に私たちは、以後次第に旗幟を鮮明にしてくる預言者の基本的姿勢をすでに窺うことができる」^⑩ことを指摘する。

一九三〇(昭和五)年三月二十八日、矢内原忠雄の終生の師、内村鑑三が心臓病で世を去つた。鑑三の死は、忠雄には大打撃であつた。すでに第三章の「三 内村鑑三門に入る」に記したように、矢内原忠雄が内村鑑三から受けた影響は、はかりしれないものがあつた。若き日の衝撃的出会いと再臨運動への共感、欧米留学後の今井館での聖書研究会から受けた影響、それは忠雄をして、「私は小学校より大学卒業に至る迄数多くの教師に就て学んだ。しかしそれらすべての学校教師より受けしことの総計も、内村先生より教へられし処に比すれば、其重要さに於て九牛の一毛にも当たらない」と言わせたものがあつたのである。

内村鑑三は前年の四月頃から病んでいた。日本赤十字社病院での診察では、心臓肥大が指摘されていた。一旦は快方に向かつたものの、年初再び病床につくようになる。が、一月十二日の聖書研究会では、「パウロの武士道」について語っていた。三月二十六日は鑑三の六十九歳(数え七十歳)の誕生日であつた。七十歳は杜甫の詩「曲江詩」の一句、「人生七十古来稀」にちなんで、古稀の祝いをするのが一般的であつた。そこで内村鑑三の弟子たちは柏木の今井館に集まつた。古稀感謝祝賀会であつた。が、鑑三は心臓の発作のため、すでに重態であつた。忠雄の『続余の尊敬する人物』(岩波書店、一九四九・二)の「内村鑑三」の項には、鑑三の古稀感謝祝賀会から召天までのことが、以下のように記されている。

彼の天に召される二日前、すなはち昭和五年三月二十六日は彼の古稀の誕生日でありました。その祝賀感謝の会を私共は今井館で催し、重態の病床にある先生のために祈りました。この日も発作的の心臓衰弱が襲ひ来つて先生の病苦を著しく増しましたが、その発作の最中に、右の祝賀感謝の会に集つてゐる人々に伝へてくれといはれて、

「万歳、感謝、満足、希望、正義、すべての善きこと。」

といふ単語だけをならべて先生の心を表現し、なほつけ加へて、「聖旨」にかなはば生きのびてさらに働く。しかしいかなる時にも悪しきことはわれわれ及び諸君の上に未来永久に決して来ない。宇宙万物人生悉く可なり。いはんと欲すること尽きず。人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成祈る。」

といはれました。死の苦しみの発作の中から内村鑑三の唇を出たこの二つの言葉が、小さき紙片にうつしとられ、私どもの集うてゐた場所にもたらされて一同の前に読まれた時、私どもは先生の靈魂の偉大さにぞかに触れたやうに厳肅な感動に満たされました。

この二日後、内村鑑三はその生涯を閉じる。葬儀は三月三十日に今井館附属聖書講堂で行われた。矢内原忠雄は内村鑑三の生涯を右の『続余の尊敬する人物』において、「教会と戦ひ、教育界と戦ひ、藩閥財閥と戦ひ、貧と戦ひ、病と戦ひ、誤解と戦ひ、孤独と戦つた内村鑑三」と評した。的確なことは選びによる内村評である。

内村鑑三には、預言者ということばがふさわしい。森有正は内村

を評して、「内村の信仰告白はこの様な、数十年に亘る、生涯をかけての人格的プロセスだつたのである。それは、西欧文明の過程においては、パウロ、アウグスティヌス、ルター、更にパスカル、キエルーゴールによつて辿られた道に比較することの出来る高い歩み、人間が真に人間として自覚的に歩む歩みであつたといふことが出来る。近代日本の先覚者の一人が、この様な、全人格的歩みを、キリスト教信仰接受のプロセスの中に、数十年を費して現実化していったといふこと、その中に、私は、日本におけるキリスト教の眞の受容の一つの姿を見ることが出来ると思ふのである」と書いている。

内村鑑三は、その後半期に聖書研究に全精力を注いだ。『内村鑑三信仰著作全集25』（教文館、一九六六）に付された「総索引」中の「聖句索引」は、旧約三十九卷、新約二十七卷のすべてに彼の言及が及んでゐることを証す。正宗白鳥は「この聖書研究は彼の一生の大事業と云ふべきで、社会罵倒論や、教会攻撃文や、人物評論や、戦争反対論などよりも、この聖書研究が、彼が世に残した価値ある作品なのだ。これだけ完備した聖書研究は、日本では他に類がないのではないか」と言う。間違いない、的確な評言だ。

そうした中でも多くの識者が口をそろえて絶讃するのが、『羅馬書の研究』である。わたしの周辺にも、早く『内村鑑三』（構想社、一九九四）の著書を持ち、二〇一一（平成二三）年の鑑三生誕一五〇年に際しては、『内村鑑三 1861-1930』（藤原書店、二〇一一）を編んだ新保祐司（文芸評論家、都留文科大学教授）がいる。新保は『羅馬書の研究』を通し、内村鑑三に出会い、鑑三の声をはつきりと聴き取ることになる。鑑三の文章には、人の心に迫る熱気がある。福音の証がある。それが最もよく現れたのが『羅馬書の研究』であつた。

『羅馬書の研究』は一九二四(大正一三)年九月十日発行。奥付によると、発行者は古我合名会社古我貞周、取次所は向山堂書房と聖書研究社が並記されている。A5判、四角と背は皮製、題字は金文字植え込み、本文七一二ページの堂々たる本である。定価は五円五拾銭なので、当時としては、かなり高価であった。同時代を席卷した一冊一円の田本全集の値段を想起してもよい。本文第一ページに「羅馬書の研究 内村鑑三講述／畔上賢造編纂」とあるように、本書は鑑三が東京大手町の衛生会館(大日本私立衛生会講堂)で講義したものを門下生の畔上が記録したことがわかる。題箋裏に「余と同時にキリストを信じ、一生涯を通うして／信仰を共にし来れる、同校同級同室の友なる、北海道大学教授理学博士ドクトル宮部金吾君に／旧友の渝らざる愛を以て此書を献ず。／著者」の献辞が記されている。初出は鑑三主宰の雑誌『聖書之研究』で、「東京講演Ⅱ羅馬書の研究」と題して、第二四七号(一九二二・二二〇)から第二六八号(一九二二・二二〇)まで連載されたものである。

いま、右の『聖書之研究』第二四七号を手にすると、第一講には本文に先立ち、リードに「本稿は内村の東京講演を基本として畔上が自己の研究をも加へて編纂したるもの、或意味に於て二人の共作と云ふべきものである」と記されている。編纂者の畔上賢造は、一八八四(明治一七)年十月二十八日、長野県小県郡上田町(現、上田市)の生まれ。一九〇六(明治三九)年早稲田大学英文科卒業。在学中から内村鑑三の聖書研究会に出席し、卒業後、県立千葉中学校の英語教師となる。一九一(明治四四)年上京し、聖書研究社の社員として、鑑三の助手を務めた。この時代畔上は、鑑三から校正の大切さを学ぶ。彼は聖書研究に熱心で、文筆に優れた能力を持つ

ていた。こういうよき編纂者を得て、『羅馬書の研究』は世に出たのである。

ところで、後年『ロマ書の研究』(教文館、二〇〇二)に「解説」を書いた山本泰次郎は、「もしこの大講演が全部、あの『ガリラヤの道』『十字架の道』のように著者自身の簡潔な、明確な、力強い高貴な文で、親しくつづられていたら、本書の迫力と価値とはいやが上にもあがっていたであろうに、とのなげきとうらみを覚えさせられる」との見方を示したが、それは望蜀の歎きと言うものであろう。

畔上賢造は一九三八(昭和一三)年六月二十五日、志半ばで没した。没後、三谷隆正・黒崎幸吉らの手により『畔上賢造著作集』全十二巻(畔上賢造著作集刊行会、一九四〇・七二五―一九四二・二二五)が刊行された。その第十一巻には「内村先生をおもふ」(初出、『日本聖書雑誌』第八八号、一九三七・四)という興味ある文章が収録されている。中の一節で畔上は、「開拓者としての先生の道は、まづ苦難と孤独との重囲のうちに始まった。建設はもちろんその目的であるが、建設のまへにまづ破壊がなくてはならない。この破壊作用こそ先生の敢行した教会攻撃であつた」とある。内村の近くにおいてその行動を見極めた者にして、はじめて言えることばであつた。

矢内原忠雄に畔上賢造を弔した一文「畔上賢造氏逝く」(『嘉信』一九三八・七、『矢内原忠雄全集』第三巻収録)があることを紹介しておきたい。畔上の信仰生活を称え、彼にミルトン・バンヤン・カーライルなどの英文学研究や、日本の思想家、——法然・親鸞・西行らの研究のあることに言及したものである。

さて、内村鑑三は「羅馬書の研究」で「余は羅馬書を講じて実は余自身の信仰を語つたのである」と言う。確かにこの一卷には、パ

ウロの信仰を語りつつ、鑑三自身の信仰が展開している。日本で「ロマ書」(ローマの信徒への手紙)の研究が隆盛を極めるようになるのは、鑑三の本書の刊行をもつて嚆矢とする。

鑑三の門下生たちもまた「ロマ書」に向かい、著書として結実させた。藤井武・黒崎幸吉・

村上賢造・金沢常

雄らである。そして矢内原忠雄もまた、「ロマ書」をとりあげ、講義をし、文章にも残した。第二次世界大戦の最中のことである。それらは戦後、『ロマ書』(角川書店、一九四九二)にまとめられた。矢内原忠雄の「ロマ書」の研究に関しては、後章(第十章)で言及することにする。ここでは内村鑑三が、困難な時代に『羅馬書の研究』を著し、その思いを吐き出したように、矢内原忠雄もまた、職を追われ、多くの人々から糾弾や誤解を受ける中で、聖書講義の対象として「ロマ書」をとりあげたことを指摘しておくに留めたい。

矢内原忠雄の内村鑑三への想いや回想を文章にしたものは、かなりの量に及ぶ。彼が影響を受けた人物には、他に新渡戸稲造や藤井武などでもいて、それらの人々にかかわる文章も多く、『矢内原忠雄全集』第二十四巻に収録されている。が、忠雄がそれら尊敬する人物の中で、最も多くの文章を捧げたのは、内村鑑三に対してであった。その中からいくつかを抜粋し、紹介しよう。

先生の講演の態度は一生懸命であった。十字架の福音に対する熱心そのものであった。講壇に立たれし先生は日常よりもたしかに十歳は若く見えた。緊張と熱意とが斯く為さしめたのだと思ふ。先生の死因は講演だと医者はいふ。若し講演を止めて居られたら尚十年はたしかに生きて居られたであらう、といふ。

併し乍ら十年の余命何かあらんや。先生は福音の為に生き、福音の為に戦ひ、福音の為に死なれた。先生齢七十歳に達したりとはいへども、尚現役の將軍として福音の戦場に名誉の討死を遂げられたのである。先生は誠に兄弟の為に生命を棄てられたのである。(初出「教師としての内村先生」『日本聖書雑誌』第5号、一九三〇年五月一日)

国を愛したるがゆゑに国賊と罵られ、キリストを愛したるがゆゑに異端と嘲られ、友人に裏切られ、弟子にそむかれ、あらゆる種類の非難を身に被りながら誠実をもつて世を送り、感謝に溢れて世を去りしか内村鑑三、その性格は円満を重んぜずして角稜に富み、温厚の君子にあらずして或は笑ひ或は泣き或は怒り或は悄然たる野人であった。野の風の如く、野の花の如く、人間の中の人間らしきものたりしか内村鑑三。(初出「内村鑑三全集」の発刊に就て『東京日日新聞』一九三三年五月二十五日)

職を失ひ、国賊よ非国民よといふ批難を一身に浴びて、先生は東京を去つた。フィレンツェを追はれたダビデのやうに、窮迫流浪の生涯が先生に始まつた。大阪の泰西学館、熊本の英学校等、転々として職を変へたが、どこでも長つづきがせず、宣教師もしくは校長と衝突してはその地位を棄てた。

この流浪の生活の中から、先生は文筆を以て志を述べる事を始めた。学校の教師としての教育事業に失望し、もしくはその道をふさがれた先生は、著述によつて教育と伝道の素志を果さうとしたのである。一つには日常のパンの資をかせぐ必要が

痛切であつた。先生の処女作であり、又不朽の名著といはれる『基督信徒のなぐさめ』は、明治二十六(一八九三)年二月大阪で、又『求安録』は同年八月熊本で著述、出版された。その夏、先生は京都に移り、窮迫の生活の中にあつて、『路得記』、『伝道の精神』、『地人論』、及び英文で How I became a Christian 等の著述をば、相次いで公にした。

(社会思想研究会編『わが師を語る』一九五三年二月二〇日)

「人は教会の洗礼を受けなくても基督信者であり得る。」「人は教会に属しなくても、キリストによつて救はれ得る。」之が内村鑑三によつて唱へられた無教会基督教の最小限である。それは単に教会の腐敗を攻撃してその内部的改革を促すといふに止らない。それは教会制度そのものの根本に関する革命的主張である。ルッターやカルヴィンがカトリック教会に対してプロテスタント教会を起した宗教改革の事業を、内村鑑三は更に徹底して無教会主義を主張したのである。それは宗教改革の徹底であり、世界の基督教史に新しい頁を開いたものである。キエールケゴールが北欧に対して為した以上のことを、内村鑑三は日本に対して為した。否、日本を通して世界に寄与したのである。この意味において先生は日本が生んだ世界的預言者である。先生の基督教史における宗教改革者としての偉大なる価値は、今日の日本人のよく理解し得るところでないが、それは後世史家の必ず認めざるを得ないところであると信じる。

(同右『わが師を語る』)

どれもが鑑三の人と仕事とを語つて止まない。しかも、核心を衝き、文章は明解である。そこには、後の矢内原忠雄の歩みにも重なる鑑三の苦難と栄光が端的に語られているのだ。先の現代の批評家、新保祐司は「今、何故内村鑑三か」の問いの下、当今の状況を踏まえて以下のように言う。

明治維新から始まった日本の近代は、まず文明開化であり、敗戦を経て、戦後は高度成長、そして情報化社会であつたが、その末路は、東日本大震災(天災)と福島原発事故(人災)であつた。

この破局を踏まえて、日本人は、日本の近代化の問題を根本から問い直さなければならぬ。今日の苦境を、日本人がこれまで得意としてきた、対症療法的なやり方(例えば、「節電」というような)でやりすごそうとするならば、もっと大きな(そして、もしかすると致命的な)破局を将来に、もたらすことになるだけであらう。

このような大きな時代の変換期、いわば時代が一度、焼野原になつてしまつたような状況の中で、明治維新以来の文明開化による日本の近代そのものが問い直されなければならないときに、内村鑑三が偶然にも(決して偶然ではないかもしれない)生誕一五〇年を迎え、振り返られることの意義は極めて深いといわざるを得ない。何故なら、内村鑑三こそ、日本の近代の最も根源的な批判者だからである。

このとらえ方は、こんにち、極めて有効である。それは「鑑三生

存中から没後八十年以上を経て」と言い直した方がいいかもしれない。新保祐司の言う、「日本の近代の最も根源的な批判者」を、矢内原忠雄は内村鑑三に見て取ったのであった。鑑三没後の矢内原忠雄の歩みは、試練と苦難の連続であった。彼は時代の波に抗するかのように、信念を曲げず状況と対峙する。

三 マルクス主義とキリスト教

一九三〇(昭和五)年五月二十八、二十九の両日、内村鑑三記念キリスト教講演会が東京青山会館で行われた。講演者は矢内原忠雄・塚本虎二・畔上賢造・金沢常雄・三谷隆正・黒崎幸吉・藤井武の七人であった。忠雄は第一日目に「内村先生対社会主義」の題で話す。それは一九三〇年七月刊行の金沢常雄主幹の雑誌『信望愛』第二十七号に載った。いま『矢内原忠雄全集』第二十四巻収録本文で、それを見ると、忠雄は内村鑑三と社会主義との関わりを、一九〇〇(明治三三)年の『聖書之研究』誌創刊から述べる。彼は「先生は国家・社会の苦難の問題より遊離して象牙の塔にこもる思想的遊戯家ではありませんでした。先生には活きた血が、活きた愛が溢れて居りました。先生は預言者の熱情を以て日本国を愛しました。愛が深刻であればある程、先生は腸を絞つて国民の腐敗墮落を責めました」にはじまり、社会正義のために闘つた内村鑑三を称える。が、「先生は社会改良運動に身を寄せずして、聖書の研究に身を投じました」とも言う。

その最後のパラフレーズを見ると、「先生は福音を恥としません

でした。「それは総て信ずる者を救はんとする神の全能なればなり。私はここに自己の小なる名譽の一切をかけて言ひます。社会改革は小なる問題ではありません。社会的不義に向つて我等は憤ります。併し社会改革の根本的真理は内村先生と彼の仕へしイエス・キリストとにあります。先生と別れし唯物論者たる社会主義者とその主義とにあるではありません」とある。

矢内原忠雄は、師内村鑑三をよく理解していた。右の一編も然りである。それは自身の社会主義・マルクス主義観にも繋がるものがあった。彼の『マルクス主義と基督教』(一粒社、一九三三)は、マルクス主義全盛期に書かれた「キリスト教弁護論」(同書戦後版「はしがき」)である。彼はマルクス主義をよく理解した。が、その根本の理論である唯物論は、内村鑑三同様きびしく否定した。彼のマルクス主義理解は尋常ではない。彼の勤務した東京帝国大学経済学部は、高野岩三郎の門下生、——榎田民蔵・大内兵衛・権田保之助・細川嘉六、そして一高時代からの仲間で、生涯のよき友となる舞出長五郎ら、マルクス経済学者の牙城であった。忠雄はその学風にもなじみ、科学的な思考の大事なことがよく分かっていた。

美濃部亮吉の『苦悶するデモクラシー』⁵⁾には、「矢内原先生によつて、マルクス主義の洗礼を受けたといつてよい」のことが見られ、外国語経済学でヒルファードイングの『金融資本論』をテキストに使うようになった一場のエピソードを記す。以下のようなようだ。

外国語経済学のテキストについては、教授会の承認を得なければならぬことになっていた。矢内原先生は、教授会において、マルクスの『資本論』をテキストに使うことについて承認

を求められたそうである。これに対し、山崎（筆者注、覚次郎、経済学部の長老教授）先生がまっこうから反対された。大内、舞出先生が矢内原先生を支持したことはないまでもない。テキストの決定については、助教も参加し得るから、教授会は混乱状態に陥り、その日の教授会では何らの決定を下すこともできなかつた。

教授会の閉会后、矢作（筆者注、栄蔵、経済学部教授）先生は大内、舞出の両先生をつかまえて、なぜ君たちはマルクスなどの著書テキストに使うことに賛成するのかと行って大いに叱つたそうである。そして、自分が行つて矢内原先生を説得するからというので、大内、舞出の両先生を従えて大森の矢内原先生の自宅に向われた。ここでまた矢内原先生との間に、小一時間もはなばなし論争が展開された。しかし矢内原先生は、マルクスの『資本論』はよい本だからテキストに使うのだと言つてどうしても譲歩しない。これでは、どうにも結論に達しようがない。その時、舞出先生が、では『資本論』の代りにヒルファデーディングの『金融資本論』を使つたらどうでしょうと妥協案を提出された。矢内原先生はそれに賛成された。というのも、『金融資本論』は、マルクスの理論に基いて、高度に発展した資本主義を理論的に分析した本であつたからである。矢作先生も、それに同意された。おそらく矢作先生は、『金融資本論』がどういう本か知つておられなかつたのではないかと思われる。知つていたら、やはりマルクスの理論を展開している『金融資本論』の採用に同意されるはずはないからである。

矢作栄蔵は経済政策を専門とする古参教授である。一八七〇（明治三年）七月、埼玉県北足立郡伊刈村（現、川口市）の生まれ。美濃部亮吉に「おそらく矢作先生は、『金融資本論』がどういう本か知つておられなかつたのではないかと思われる」と言われたように、新しい学説を学ぼうとしない、否、受け付けない学者であつた。

矢内原忠雄はマルクス主義の学説をよく理解したものの、科学と信仰という点では、信仰を優先する立場を終生離れなかつた。そこが忠雄の原点であつたからだ。彼は自身のキリスト教とマルクス主義との関係を「私の人生遍歴」⁵⁵で振り返っている。そこでは社会の変動期にあつてマルクス主義の研究が盛んになった時代を振り返り、「当時の経済学は、社会科学の最先端を行くものとしてマルクス主義の科学的な研究方法によつて強く影響されました。科学は実証的な分析の態度を必要とするものであつて、単なる感情や感想では研究できない。科学的な分析の方法によらなければならぬ、と言われた。これは至当のことでありまして、私も、そうでなければならぬと思つております。ところで、信仰というものは科学的な分析を越えたもので、そのようなア・プリオリ的（先験的）な、独断的な思想を前提としてすることは、すでに科学的でない。それ故に、信仰をもつたものは科学の研究には不向きである。矢内原君がキリスト教の信仰をもっている限り、彼は社会学者として徹底することとはできないだろう、ほんとうの学者になれないだろう、と言わんばかりの批評がありました」と言っている。

そうした批判に答えて彼が著したのが、『マルクス主義と基督教』である。初版は一九三二（昭和七）年三月、名古屋の一粒社という小出版社から刊行され、版を重ねた。が、第二次世界大戦によつて

一粒社は罹災し、紙型を焼失したため、戦後、長崎次郎の経営するユニークなキリスト教出版社、新教出版社から一九四七(昭和三二)年五月に付録の四編が除かれて再刊された。長崎次郎は、忠雄の一高基督教青年会時代の学友長崎太郎の弟である。

戦後のキリスト教ブームとマルクス主義の浸透もあって、この新教出版社版本は知識人によく読まれた。さらに一九五六(昭和三一)年七月には、新教出版社版が角川文庫の一冊となり、大塚久雄の解説付きで刊行された。角川文庫になるに際し、タイトルが『マルクス主義とキリスト教』と『基督教』が『キリスト教』に変更された。本書は比較的息の長い刊行物である。特に第二次世界大戦を挟んでの刊行であることに注意したい。初版以来、「戦ひの先がけ／藤井武兄に／此の小著をささぐ」の献辞が扉裏に刷り込まれている。以下、本書の引用は、角川文庫版を底本とした『矢内原忠雄全集』第十六巻収録本文による。

忠雄はこの書で、マルクス主義とキリスト教の違いを鮮明に告げる。「序論」にそれを見よう。忠雄は「マルクス主義の思想体系としての特色は第一に唯物的たること、第二に社会的たること、第三に歴史的たること、に要約しうであらう」という。的確なマルクス主義理解である。それに対してキリスト教は、「救主イエス・キリスト」にすべてを負うものとする。それ故「マルクス主義とキリスト教とは絶対に妥協せしむるをえない」ものだという。忠雄はマルクス主義を安易に否定しない。彼は「序論」の二で、「マルクス主義者について感心せられるのはその主義に対する忠実、その理想に対する不撓の熱誠、その実行に関する勤勉努力である」とし、対する今日のキリスト教会が「妥協的にして惰気満々たるのに対して好

個の対象である」とまで言う。さらに「かれらは貧窮を恐れず牢獄を恐れず、一生を不遇の間に過してなほその道の勝利を信じて疑はない。かれらはその意気と確信とにおいて初代教会に比せらるべきものである。マルクス主義の主張およびマルクス主義者の行動に対する賛否は別として、その主義のために忠実なるは敬服せざるをえない」と彼はマルクス主義者の長所をあげる。そこには昭和初年代にはじまる、国家権力を笠に着た弾圧にも屈せず闘う人々が、マルクス主義者にいることが意識されていた。

その上で社会主義者の歴史観である唯物史観にメスを入れる。「社会主義者の歴史観は即ち唯物史観である」と忠雄は言い、「唯物史観の要領」を以下のようにまとめる。

即ち今日の資本主義的生産社会について言へば、資本家的搾取経済の終了は資本主義経済の進行に伴ふ必然なる運命である。それは時満つるまでは完全に行はれないが、時来れば必然に行はれるものである。しからば個人または階級の努力による闘争は無意味であり不必要であるかといふのにけつしてしからず。第一に社会的生産の進展は人類の意志を決定し人類の意識を通じて働く。第二に歴史的発達の方に一致して人々の努力するといなどは歴史の進行に対する障害を除き、犠牲を減少し、もつて円滑なる発展をえせしむる所以である。しかして今日の資本家的社会形態が無産階級の勝利をもつて終ることににより搾取掠奪の時代は終り「人類の歴史前期は終結を告げ」、生活らしき生活、歴史らしき歴史はこれより始まるものとなすのである。

こうした社会主義者の唯物史観に対し、キリスト者の歴史観はどうなのかを、忠雄は次のように説明する。

キリスト者は信ずる——人類の歴史は神の御手にある、歴史の進展および将来は神の導き給ふところであつて個人を超越せる力が真に歴史を作るのである。神は一定の御経綸に従ひて人類の歴史を指導し給ふ。即ち神の国の実現である。マタイ伝第二十四章に示さるるごとく、神の国は時満たねば完全に実現せられず、しかしして時来たらば必ず実現せられる。しかしして神の国実現の問題は既にこれを解決すべき条件が存在し、あるひは少くとも発生しかけてゐるのである。かく神の国実現の方向に人類の歴史は導かれる。しかししてその偉大なる歴史の動力は個人の意識を刺戟して不信者をしてこれがために奮起せしめる。ここに不信者と信者とは神の国実現のために闘争する。キリスト者が神の国のために働くは、神に対する信仰がかれに迫りてやむをえざらしむるものであり、またそのことの結果は神の国実現のための障害をとり除き神の国実現のみちを坦かにする所以である。「キリストの体なる教会のために我身をもてキリストの患難の欠けたるを補ふ」(コロサイ書一二十四)。しかししてこの罪の世の終了とともに人類は始めて真の生活、生活らしき生活をなすをうる。この意味においてこの世の終末とともに人類の「歴史前期」が終結を告げ、人類としての真の歴史が始まるのである、と。

「序論」の「三 キリスト教とマルクス主義」では、「キリスト教

は歴史上内外度々の試練をへて来た。最近においては世界大戦がそれであつた。しかししてマルクス主義もまたその一である」と言う。忠雄はマルクス主義の長所を十分認める。それ故「いま、マルクス主義を見よ。かれらは貧民の友、搾取抑圧せられてゐる者のための闘士として立つ。かれらは社会における抑圧搾取の事実を鋭く認識し、これを攻撃し、民衆を解放して自由を獲得せしめんために戦ふ。現代キリスト教会にはそれだけの認識と理想と戦闘力とありや。教会は自ら問うて見るがよい、強者と弱者と相争ふ際教会はしらずしらずの間に強者の側に立ちてゐるではないかと。かれらは圧迫に対する反抗を苦々しく思ひはするが、圧迫そのものの不正不義なることを攻撃することはなしえない」とも言う。また、次のような本質を衝いた見解も披瀝する。

マルクス主義の思想は根本において唯物論である。かれらは理想の働きを認めるけれども、窮極において理想もまた物質より派生するところ、物質世界の規定し指導するところと認める。唯物史観の解釈には種々あるも、その根柢は唯物論であると見ねばならない。しかししてこの思想が実践に現はれる時、所謂境遇改善の主張となる。即ち、人の善悪は境遇の所産であるから、境遇をよくすることは人を改善する根本的条件である、といふ議論である。しかしして奇態なることには、現代キリスト教会はしらずしらずの間に、この点においてマルクス主義と同じ立場に立つ。現代教会の努力は靈の救の問題よりむしろ境遇改善運動に重きを置いてゐるのではないか。かれらは聖書の研究を怠る。かれらは祈祷よりもスポーツを愛する。贖罪復活等信仰の根本問題を説かずして社

会的事業を高調する。教会に人を吸引する策としては福音を説くよりも音楽映画に着眼する。何よりも、かれらが教会を尊重すること自体がその唯物思想を暴露する。

ここで矢内原忠雄は、キリスト教がマルクス主義と異なるのは、「聖書の研究」にあり、霊の救いが大事で、「信仰の根本問題」である贖罪や復活を説くところに、その違いがあるとす。そしてキリスト教会を革新する道は、「イザヤ、エレミヤ、アモス、洗礼者ヨハネへの復帰である」と言う。さらに「信仰の客観性に立つ」ことと、「霊の救の福音に立つこと」を強調する。以下本論で彼は、「一科学と信仰」にはじまり、「宗教は阿片なりとの論」「真理」「道徳」「自由」「社会運動」「階級闘争」「弁証法」「革命論」「キリスト教批判」などの項目を立て、マルクス主義とキリスト教の違いを截然と述べる。

「結論」の箇所では忠雄は、「世との妥協を排斥して戦闘的たれ、合理主義を排斥して神の一切の摂理を信ぜよ、罪の意識を重んぜよ、霊と来世とを信ぜよ、エクレシヤの觀念に徹底せよ、預言者の精神を恢復せよ。キリスト教はキリスト教であることによりてのみ、またそれによりて十分に、すべての人間的思想にうち勝ちてあまりがあるのである」と言う。ここに眞の信仰者矢内原忠雄を認めることができる。

本書を読んだ哲学者の三木清は、『帝国大学新聞』第四二九号(一九三二・四・二五)に「宗教改革か社会改革か 矢内原忠雄氏著『マルクス主義と基督教』と題しての批評文を載せた。三木は『マルクス主義と基督教』を実に丁寧に読みこなした上で、「矢内原教授の

思想は自から神秘主義的傾向をとり従つて現実の世界の問題には無関心とならないであらうか。『生産手段が私人の所有に属しようが社会の共有に属しようが、キリスト教はそのいづれを以て真理なりと断定する立場にもあらず興味を感じない。』このやうな無関心はやがて社会からの逃避となる危険を含まないだらうか」と言い、矢内原教授は、「宗教を社会運動から分離して一の神秘的境地に満足することを本領とせよといはれるのであらうか。いづれにせよ、我々はこの書を問題の書として読者の研究に勧めたい」と結ぶ。

実は、矢内原忠雄の以後の困難な歩み自体が、三木清の書評への的確な反論となるのだが、そのことは別にして、矢内原忠雄は同紙次号の第四三〇号(一九三二・五・二)に、「三木清氏の拙著批評に答ふ―『マルクス主義と基督教』に就て―」を書く。本格的な反論である。ここで忠雄は、「三木清が「極めて眞^{まこと}なる態度と言辞をもつて批評せられし事は特に感謝に堪えない。これに対して一言するは読者に対する礼儀であると思ふ」と言い、反論を展開する。忠雄は三木清が「矢内原教授の思想は自から神秘主義的傾向をとり従つて現実の世界の問題には無関心とならないであらうか」と問うたのに対して、二つの点を質せうとする。忠雄自身のことばで示すなら、以下のようだ。

第一は宗教の本義は神秘的なるものであるや否や。

第二はこの神秘の本質を有する宗教は現実の世界の問題に無関心たるや否や。

いかにも矢内原忠雄らしい反論である。彼は続けて「神秘(霊)

のなき所に宗教そのもの、固有の存在はあり得ない」と言い、さらに以下のように論駁する。

信仰が知識の問題であるなら、知識の進歩によつて宗教は消滅するに至るかも知れない。マルクス主義の宗教観はその如き主張であると思ふが、私のこれに反対する所以も、又こゝにあるのである。第二に靈的信仰が現実の世界の問題に無関心であるとするればそれは修道院的信仰であつて、少くともプロテスタントの信仰はさうでない。現実の世界の問題に処する生活力生命力の根本として、靈的信仰を重視するのである。然して斯の如き靈的信仰に立つキリスト教は具体的なる社会組織、社会運動に対してそれ自身として一定の態度を固有するものでないといふのが私の主張である。

説得力のある反論である。後年、矢内原忠雄没後になるが、大塚久雄は本書にふれて次のように書いている。これも貴重な証言なので、引用しておきたい。

『マルクス主義と基督教』の初版が公刊されたのは昭和七年三月のことであつて、いまでは、それからすでに三十余年を経過している。この三十余年の時間的経過をへだてて、いまわれわれは、とくに社会科学の側からみて、この書物をどのように考えたらよいのであろうか。その間、マルクス主義者によるマルクス理論の解釈にもさまざまな変遷があつた。とくに、この三十余年の間にはスターリン体制の確立と崩壊が含まれてい

る。そうしたことからでも判かるように、いまからみれば、この書物にはすでにさまざまな問題がはらまれていたことは否むがたい。しかし、それにもかかわらず、世界観と科学の峻別、そしてこの両者の相関のうちにみられる激しい緊張の關係、この点を明瞭に指摘された矢内原先生の眼はやはり正しかつたと、いまわれわれはいわなければならぬ。というのは、世界観と科学の峻別や両者の間に生ずる緊張關係の存在をみとめなはずのマルクス主義思想のなかにも、近來ようやく「人間」の問題が公然と論じられるようになって来たからである。そうした意味連関において、そしてまた、とくにキリスト者にとつて、矢内原先生の『マルクス主義と基督教』はいまもなお十分な生命力をもつて生きているのであり、今後も生きつづけるであらうと思う。

大塚久雄は右の文章の別のところで、「矢内原先生は全身全霊を傾けてキリスト教の真理を弁証しようと試みられた」とも言う。マルクス主義を安易に否定するのではなく、キリスト教と対比しながら双方の違いを説く矢内原忠雄の論述を評価しているのである。大塚の論が発表されてからも、はや半世紀近く経つが、その言説の意味はいよいよ重い。

日本思想史研究の家永三郎は、矢内原忠雄の「キリスト教とマルクス主義」の見解を、「通常は到底あい容れない思想とされているキリスト教の信仰とマルクス主義の科学とを主体的に統一することにより、日本の現実に鋭い批判を加えた」と評したが、これまた忠雄の営為を的確に見抜いたものである。家永三郎は生涯を通して、

矢内原忠雄のよき理解者であったと言えよう。

なお、本書は一九八二(昭和五七)年二月八日の日付で、岩波書店から再刊されている。中村勝己の懇切丁寧な「後記」と題した解説付きである。

四 反動の波に逆らう

時代は大きく変わろうとしていた。矢内原忠雄が台湾調査旅行を行った一九二七(昭和二年)春、日本の社会では金融恐慌が起こり、銀行預金の取付け騒ぎが各地で生じていた。大企業の鈴木商店の破産にはじまった金融恐慌は、三月末には日本統治下の台湾の中央銀行が鈴木商店への不良貸付などのため資金難に陥り、四月には近江銀行とそろって休業する事態を迎える。貴族銀行と言われた十五銀行も四月二十一日に整理休業に追い込まれる。恐慌からんで若槻礼次郎内閣は総辞職し、陸軍大将田中義一が政友会に迎えられ、首相となった。恐慌騒動が一段落した五月二十八日、田中内閣は世論の反対を押し切り、中国山東への出兵を敢行した。前途の見えない不安な時代の到来であった。

矢内原忠雄はまさにこの時期、台湾に取材旅行に出かけ、帰国直後、前述の「台湾における政治的自由」(『帝国大学新聞』第二〇号、一九二七・五・三三)を書く。そこには台湾銀行事件も取り上げられている。彼は言う。「台湾の専制政治的威力は最近最も明瞭に発揮せられた。台銀事件之である。台銀問題に関しては台湾の新聞は之を掲載せざるのみならず、内地新聞はその関係記事をば缺で切り抜き

たる上移入せられたのである。台湾の新聞を見て居たのでは内閣更迭の原因すら知らないのであった。かくの如き総督の威力を以て台湾民衆は殆ど何も知らずに台湾銀行を事件の中心とする財界恐慌の一ヶ月を経過したのである」と。忠雄はここで日本統治下の台湾における「政治的自由の問題」を提起しているのである。

七月二十四日早朝、前章でふれたように、一高で同期だった芥川龍之介が自死した。芥川は「唯ぼんやりとした不安」を遺稿「或旧友へ送る手記」で訴えて、自らの命を絶った。早すぎる死であった。忠雄の芥川の死に関する直接的言及は見出せない。が、芥川もまた、忠雄同様、しっかりと日本の現実を見つめ、粗雑な軍国主義への道を歩む祖国の行き方に、異議申し立てをしていたのである。特に一九二一(大正一〇)年の中国視察旅行、一九二三(大正二二)年の関東大震災を経ることで、それまでの作風とは異なった現実凝視と批判に満ちたテクストが多くなる。「母」(『中央公論』一九二二・九)にはじまり、「將軍」(『改造』一九三二・二)「桃太郎」(『サンデー毎日』一九二四・七・二)「湖南の扇」(『中央公論』一九二六・二)、それに紀行文『支那游記』(改造社、一九二五・二)などには、日本の現実への芥川の眼、不条理な世界へのやりきれない思いがにじみ出ているのを見逃すことはできない。そうした中で、彼もまたキリスト教に接近、「西方の人」(『改造』一九二七・七)、「続西方の人」(遺稿『改造』一九二七・九)のイエスを残した。

矢内原忠雄のこの世との厳しい闘いは、芥川の死の後に来る。激動の昭和史は、中村政則の言うように「芥川の死とともに始まる」としてよいのである。時代のいつそうの右傾化を前に、忠雄はそれを黙って見ているわけにはいかなかった。彼はそうした

流れに立ち向かう。彼は帝国主義日本の専制政治を批判する。朝鮮や満洲や台湾で見た日本人の横暴、——それは彼をして、日本政府批判へと向かわせるのであった。

一九二八(昭和三年)は、小林多喜二の小説「一九二八年三月十五日」〔戦歴〕一九二八・二一〜二二)で知られる事件の起こった年である。この年三月十五日、日本共産党への大弾圧が行われ、政府は一道三府二十県の関係者千数百名を一斉検挙した。弾圧は党員以外の同調者や労農党などの活動家、それに各大学の社会科学研究会会員も含まれていたことから、文部省の左翼教授追放策が浮上した。京大の河上肇が大学を追われるという事件は、その余波であった。『京都大学百年史 部局史編1』(財団法人京都大学後援会、一九九七・九)には、河上事件に関する以下のような記述がある。

昭和三(一九二八)年三月十五日、日本共産党への大弾圧が行われた(三二五事件)。この中には京大をはじめ各大学の社会科学研究会の会員も多数含まれていたことから、文部省では学生の処分、「左傾」教授の進退、社会科学研究会の解散を四月十二日に省議決定し、総長らに方針の徹底を図った。それから二週間、全国の大学で「左傾」教授の追放と社会科学研究会解散の嵐が吹き荒れ、東京帝大の大森義太郎・九州帝大の向坂逸郎らとともに、本学の河上肇が四月十八日付で大学を辞するに至った。また、同日には京大社会科学研究会も、総長命令により解散を余儀なくされた。

世にいう「河上事件」は、当時、ファシズム化への歩みを速めていた政府・文部省による本格的な大学・思想統制の一端で

あった。

河上事件は、次に来る京大事件の予兆であった。一九三二(昭和七)年の九月十八日、柳条湖の鉄道爆破事件を契機として起こった日本の中国東北部への侵略戦争(満洲事変)は、政府の不拡大方針にも関わらず、現地軍が独走し、戦線は拡大した。軍部は一気に勢力を強め、大学は危険思想を生む場として攻撃の対象となるようになる。

内村鑑三が没して四ヶ月もたたない一九三〇(昭和五)年七月十四日、矢内原忠雄の先妻愛子の姉喬子の夫藤井武が胃潰瘍で没した。四十二歳の若さであった。葬儀は七月十六日、新宿柏木の今井館講堂で行われた。忠雄は藤井主催の雑誌『旧約と新約』最終号(一九三〇・八)に、「預言者の生涯と死」を寄せ、その死を悼んだ。矢内原忠雄の時代との闘いを語る時、藤井武の死とその全集刊行のことは、避けて通ることが出来ない。忠雄は早くから藤井の人とその信仰を尊敬してやまなかつた。忠雄の「藤井武小伝」(第一次『藤井武全集』第十二巻に、塚本虎二の「跋」と共に収録され、『藤井武君の面影』藤井武全集刊行会、一九三二・二〇)にも収録)は、格調高い文章で藤井武の生涯を描いたすぐれた評伝文学ともなっている。

藤井武は一九一五(大正四)年十二月、内務省官僚を辞して上京、伝道を志し、内村鑑三の助手として、『聖書之研究』の編集に携わり、同誌に寄稿するようになる。一九二〇(大正九)年六月には、独立して雑誌『旧約と新約』を創刊し、編集と執筆に打ち込んでいた。その頃の著作に『永遠の希望』(岩波書店、一九二二・二二)がある。当時在外研究中の忠雄は、ベルリンでこの書を受け取り、喜びにふける。なお、東京目黒の今井館資料館所蔵の矢内原忠雄旧蔵『永遠の希望』

の扉には、「一九二二年二月 独逸伯林にて／矢内原忠雄」の書き込みがある。藤井には、一九二七（昭和二年）十二月二十五日の日付で岩波書店から刊行した、『イエスの生涯とその人格』など、名著の名に値するものがいくつもある。まさにこれからという時に、彼は天に召されたのであった。矢内原忠雄は、藤井武にかかわるいくつもの追悼文や回想を書いているが、以下に二つの雑誌から引用する。

彼の信仰は神を絶対に義とし、神に絶対に信頼する生活そのものであった。彼の信仰は概念とか思想とか信条とかいふものではなかつた。絶対信頼の思想にあらず、その感情にもあらず、絶対信頼の生活そのものであった。生活の中心、生活の内容、生活の態度であつた。彼は生活中心と共に生活態度を重んじた。神を信ずると共に神を信ずる生活態度の誠実性を要求した。彼は最近私に語つて言つた、「若し信仰と真実といづれか一つを選ばねばならぬとするなら、自分は真実を選ぶ、何故なら真実なる心は神を知ることが出来るが、真実のない信仰はパリサイ主義に陥るから」と。彼が人生観の根柢を問題にするときは、それは単に人生の観方だけではない、又同時に人生の行き方の問題である。真実こそ彼の人生の根柢であつた。真実を愛したる彼は一切の虚偽と打算を憎んだ。彼は厳かなる存在であつた。

〔預言者の生涯と死〕旧約と新約 第二三号（終刊号）、一九三〇年八月五日

彼は恩師の屍を越えて戦ふといつた。あらゆる真理の敵に向つて宣戦を布告すると叫んだ。その声はなほ吾人の耳朶に残る。

しかも彼その人が早くも戦死してしまつたのだ。何たることであるか。地上の戦は我等に遺された。我等は彼の剣を拾ひあげて敵に向ふ。彼の屍を乗り越えて真理の敵と戦ふ。余は彼の死を悲まない。余は彼の剣を拾ひあげて敵に向ふ。内村先生は死しても藤井が戦ふと宣言したやうに、藤井も死しても我等が戦ふことを、人類に向つて宣言せんと欲するものである。

〔真理の敵〕『永遠の生命』第六〇号、一九三一年二月一日

矢内原忠雄は「真理の敵」と闘うことをここに決意する。「真理の敵」という表現は、藤井武が最初の内村鑑三記念キリスト教講演会（東京青山会館、一九三〇・五・二九）で用いたことばであつた。藤井は「近代の戦士内村先生」と題した講演の結びで、「私どもはすべての真理の敵にむかつて、新に宣戦を布告します」と述べたが、忠雄の言う「真理の敵」は、藤井の用いたこの印象的なことばに負うている。その具体的な闘いの第一は、『藤井武全集』の編集であつた。忠雄は企画力と実行力に優れた資質を有していた。矢内原がやるなら人々はついてくるのが常であつた。それは自分を殺しても人を立てる、というリーダーとしての資質が彼にあつたことを示す。神戸一中時代から彼は常に人の先頭にいることが多かつた。そうした自己犠牲を顧みなかつた点が、この場合にも機能した。彼は藤井武全集刊行会を作り、藤井と同級だつた塚本虎二が乗り気なのを知ると、二人してその代表者となつた。

藤井武全集刊行会は、一九三〇（昭和五）年十一月、矢内原忠雄の自宅を事務所が発足し、第一巻を翌一九三一年二月二十五日に刊行した。忠雄執筆の「刊行の辞」（塚本虎二との連名で発表された）の書

き出しには、「預言者はその故郷に於て尊ばれない。藤井武君も亦武蔵野の一角に立ちて叫ぶこと十年、遂に国人は彼に耳をかきなかつた。／＼しかし知る人ぞ知る、彼は大正・昭和のエレミヤであった。我等は彼の如くに預言者らしく生きまた死にたる人を多く知らない。また彼の如くにキリストの十字架の信仰を高唱したるプロテスタントの勇者を見ない。日本は確信を以て彼を世界に誇ることが出来る」とある。まことにふさわしい「刊行の辞」である。以後、藤井武全集刊行会は毎月一冊の配本を守り、一九三二年一月二十五日、全十二巻の刊行を終える。『藤井武全集』刊行の苦心は、『私の歩んできた道』²⁾には、次のように回想されている。

睡眠時間が非常に少なく、五百ページないし六百ページの本の編集を毎月して、校正をも自分でやり、予約募集をし、書物を包装して郵便局へ持つて行くまで自分でした。そういう教授本来の仕事じゃないことをするために、講義や論文を書くのを怠つて人から非難を受けてはならないと思い、零細な時間を惜しんでやりました。電車の中とか、夜おそく校正をするので目を悪くした。今でも、よくやったものだと思うんです。僕の家の内の父親が危篤という電報がきたのですが、どうしてもやりかけている校正をやつてしまわないと発行日に本ができないというわけで、もうちょっと、もうちょっとと思つて、朝の汽車に乗らないで午後の汽車に乗つたために、家内の父親の死に目に会えなかつた。非常に残念だつたけれども、許してくれるだろう。

まさに寸暇を惜しんで、忠雄は『藤井武全集』の刊行に当たつた。恐るべき執念ともいえるものが、そこにはあつた。義父堀米吉の死は、一九三二(昭和六年)七月十九日であり、忠雄は第六巻の校正中で、その臨終にも会えなかつたのである。このことは、返す返すも悔やまれた。それは七月二十四日付の矢内原恵子宛、忠雄書簡からも読み取れる。一部を抜粹する。

今度のことはほんとうに悲しくありました。僕は松村、宇佐美両兄のやうに行き届いた御世話をする能力も無く其の地位にもありませんのでお父様に取りて全く役に立たぬ子でした。僕の持つてるものはただイエス様の福音だけで、僕に出来る事と言へばただ信仰の点でお父様を慰め助けまゐらすだけですので、お父様が死の苦しみに難戦苦闘せられてる際に、その最も必要とせらるる慰め助けの一言もお耳に入れて差上げずその御苦しみの一端にも与ら^{あづか}ず、その苦しみ御身体の指一本さすつて差上げることも出来なかつたのは実際残念でたまりません。

『藤井武全集』の編集・校正・刊行の仕事は、忠雄がほとんど一人で行つていた。子息の矢内原伊作に、「(全集刊行会の)代表者は塚本虎二と矢内原忠雄の二人だが、塚本はいわば相談役であり、実際の仕事は忠雄がほとんど一人で遂行したのである。その仕事たるや煩雑膨大を極めるものだつたが、彼は獅子奮迅の勢いでこの仕事に心血をそそいだ」との証言もある。ともかく彼はこの大仕事を成し遂げた。彼は『藤井武全集』の編集が、「真理の敵」との闘いであ

ることを信じて、時に家庭を犠牲にしてまでも、まっしぐらに突き進んだのであった。

一九三二(昭和七)年四月、矢内原家は東京府荏原郡碑倉町大字倉二四七六番地(のち、東京市に編入の際の地番変更で、東京市目黒区自由ヶ丘二九四番地となる)に転居した。以後生涯を送った家である。矢内原伊作によると、「自由が丘は渋谷と桜木町を結ぶ東京急行電鉄東横線(以前は東横電車といった)と、大井町から二子玉川方面に通じる田園都市線(以前は日蒲電車大井町線といった)との交叉するところで、今日では比較的高級な住宅が密集し、駅の周辺は一種の繁華街になっている。が、私の一家が引越してきたころはまだ全くの田舎で、商店などもかぞえるほどしがなく、武蔵野特有の雑木林と畑がひろがっていた」とのこと。

自由ヶ丘駅(現、自由が丘駅)まで徒歩約六分、都心に出るにも便利などところである。わたしは発展した現在の自由が丘駅から矢内原邸までを何度も歩いて見たが、駅にも近く便利な地である。一九三五(昭和一〇)年には、新宿柏木の故内村鑑三宅にあった今井館聖書講堂(第二次世界大戦後、忠雄の聖書講義の拠点会場となる)も、近くの目黒区中根に移ってくる。忠雄はよい場所に家を得たことになる。むろん当時は、例に漏れず土地は借地であった。忠雄死後も、恵子夫人とその子で慶応義塾大学教授となった矢内原勝(二〇三二・二七没)は、この自由が丘の家に住んだ。現在はアパート形式の家となった旧矢内原忠雄邸の入口には、「矢内原勝」と書いた門札が、相変わらず架かっている。忠雄はこの地で「真理の敵」との闘いを継続するのであった。

忠雄は『藤井武全集』の仕事に全力で当たり、ともかく全十二巻

をこの年一月二十五日に完成させていた。二月十一日、東京神田の学士会館で刊行完了の感謝会がもたれた。忠雄はその模様を「藤井武全集の刊行を終りて」に書いている。その中で彼は次のように言う。

○全集刊行は戦ひであつた。青山会館に於ける内村先生記念講演会に於て彼自身が宣言したる真理の敵への戦闘をば実行せるものであつた。併し私はずくづく感じた。戦ひといへば強く響くが、慰めも亦大なる戦ひであることを。藤井全集によりて多くの弱き者病める者が慰められた。傷める輩を折る者がある、煙れる亜麻を踏み消す悪の霊がある。傷める者の心に送る慰めは、この悪の霊、この痛ましめる者を打ち挫く。最も柔和なる慰め手が最も勇敢なる戦士なのだ。

○戦ひは終つた。私は激戦の後一人広野に立つ思ひである。満身痛手。四周薄暮。

忠雄は苦しかった日々を振り返り、このように言つた。が、「戦ひ」は終わっていない。時代と、それからからむ深刻な闘いが、彼を待ち受けていたのである。

一九三二(昭和七)年八月二十六日から九月二十一日までの約一月、彼は満洲国視察旅行に出かけている。旅のことは、彼の「匪賊に遭つた話」をはじめ、『満洲問題』(岩波書店、一九三二)収録の「満洲見聞談―昭和七年八月九月」(初出は『改造』一九三二)などの紀行文によつて伺うことができる。これらは内務省の検閲が一段と強まる中でのもので、慎重な配慮が諸方に見られるものの、総じて国に

対する批判に満ちた文章となっている。

すでに記したところだが、日本は一九三二(昭和七)年九月十八日、奉天(現、瀋陽)郊外柳条湖の鉄道爆破事件をきっかけとした満洲事変を起し、翌年(一九三三)三月一日、清朝最後の皇帝溥儀を執政に、満洲国を中国東北部に建国した。日本の傀儡政権の国家である。矢内原忠雄はそうした動きに懐疑的であった。それだけに現地に行き、現状をしっかりと見たいと願っていた。が、この年(一九三三)二月、関東軍特務部からの出張依頼には、直ちに電報で断っている。彼は関東軍のお雇いによる御用学者の立場を避けたのである。けれども満洲に行き、現状を見てきたい、事実調査をしっかりとしたいで、文章にしたいという念は高まっていた。それが殖民政策という授業を担当する者の使命とも考えたのである。そこで彼は、勤務先の東京帝国大学経済学部からの研究出張という手続きをとって、満洲へ旅立つ。

五年前の台湾調査の際には、拓務省や台湾総督府の世話にならなくとも、蔡培火や葉榮鐘はじめ現地の人々の強力な支えがあった。しかし、今回の満洲への旅は、関東軍特務部の招聘を断つての視察の旅である。知人の協力も期待できない。彼は満洲国からの依頼によるひも付き出張をさげ、関係筋からは白眼視される旅を覚悟で出かけたのである。それゆえこの時の忠雄の満洲旅行は、腰を落ち着ける場も、親しく付き合ってくれる人もない孤独なわびしい旅となった。そうした中で、匪賊に襲われるという事件にも遭遇する。そのことを書いたのが、「匪賊に遭つた話」である。題材が題材だけに、彼は慎重の上にも慎重を期して書いている。

「匪賊に遭つた話」は、「この夏私は満洲を旅行して匪賊に遭ひま

した。その記事が新聞に出ましたので、皆様に一方ならぬ御心配をおかけしたと思ひます」(引用は「通信」一九三三による。以下同様)にはじまり、彼の出会った出来事について書いている。「匪賊」ということは、現在ほとんど使われないが、「徒党を組んで出沒し、殺人・掠奪を事とする盗賊(「広辭苑」)である。中国東北部の新京(現、長春)からハルビンに向かう列車が、夜の十時三十分頃匪賊に襲われ、かなりの犠牲者の出た中で、「列車の中央にあつた私共四人の一部屋だけは完全に見落されて、身体の怪我の無い事は勿論、持物の被害もなく、ピストルも突きつけられず、否、賊の顔も見ず又見られもせずに済んだ」というのである。忠雄はこの事件に、以下のような注釈を加える。

皆さんは私が運がよかつたと言つて喜んで下さいます。併し運ではないと私にははつきり言へるのです。私は前にも申しました。この事件の最初から少しも恐怖危険の感じが起りません。に及ばぬといふ安心が初めからありました。賊が来て部屋の前を通り過ぎた時には、丁度大きな方が袖を払って後にうづくまつてゐる私どもを掩ひ隠したが為に、賊が気付かず過ぎて行った様な気がしました。昔モーセがイスラエルの人をエジプトから救ひ出す時、エホバの使が剣を抜いて町々を歩きましたが、イスラエルの家の門口には小羊の血を塗つて置いた為、それが目印となつて、エホバの使はイスラエルの家の前を過ぎ越して禍を加へなかつたといふ話であります。何だかその時の様な心安らかさが感じられたのです。確かにこれは神様が私を賊

の目から掩ひ隠して下すつたのです。神様が一寸袖の端を拡げられると、それで私は危地に居りながら絶対安全であったのです。

忠雄はここで神の摂理を持ち出す。運命や宿命ではなく、摂理 (providence) である。彼のキリスト教信仰は、この事件によつていっそう確固としたものとなる。なお、満洲視察旅行中に生じたこの事件を、忠雄は心配してくれた友人たちに知らせ、感謝を共にして貰いたいと思つて小冊子『通信』を刊行、その創刊号に本文を載せたと「思ひ出一」(『葡萄』一九三九二)で語っている。『通信』は後の彼の伝道にとつて大きな役割を演じた『嘉信』の前身誌である。忠雄はまた、のちに「戦の跡」という文章で満洲旅行について回想し、「この旅行中、私の乗つた列車が匪賊の襲撃を受けて遭難した事件は、満洲問題に対する私の公の態度に何らの影響をも与へなかつたが、之が動機となつて『通信』が生まれた事を思へば、そこにも神の大なる摂理の御手ははたらいていたのであつた」と書いている。ついでながら、右の「思ひ出一」には、次のようなエピソードめいた記事が見られる。先の関東軍特務部からの専門家会議招聘状に關してである。引用しよう。

この時私の外に大内教授と土方教授とにも、同様の招電が来たのであつた。大内教授は一週間ほど経つてから手紙で鄭重に断つてやつたさうだ。土方教授は丁度台湾へ行つて居たが、台湾から大連へ直行し、会議に出て、「財源には人頭税こそ然るべし」てな愚論を吐いて歸つたといふ噂である。三人三様の態

度は各自の性格にもよるが、時局との關係に於ける三人の運命はこの出発点で既に決つたやうなものである。

言うまでもないことながら、大内教授とは、矢内原忠雄を終生よく理解した大内兵衛であり、土方教授とは、のち東京帝大経済学部長として忠雄の言動を批判し、辞職に追い込む工作をした土方成美である。忠雄は人の批判をあまりしないが、ここではかつての土方のやりきれない行為に対し、ちくりと皮肉を言っている。忠雄の東京帝大経済学部辞任に至る経緯は、次章(第九章)で取り上げ、詳しく述べることにする。

一九三三(昭和八)年一月、ヨーロッパのドイツでは、ヒットラーの指導するナチスが政権を取る。日本では同年五月、京都大学瀧川幸辰教授の罷免問題、——いわゆる京大事件が起こつた。京大事件の詳しい経過は、小著『恒藤恭とその時代』に記したので、ここには概略のみを記す。この年四月、内務省は瀧川の著書『刑法読本』(大畑書店、一九三二・六)と『刑法講義』(弘文堂書店、一九二八・六)の二著を発売禁止処とした。文部省はそれを受けて、その学説が国の安寧秩序を乱すとして、翌月、瀧川を休職扱いとした。それに対して京大法学部は、学問・研究の自由を奪うものだとして、佐々木惣一を中心に教授十五名が辞職申し合わせ状に署名した上で抵抗する。事が瀧川教授の分限(身分)にまで展開していったからであつた。瀧川幸辰の休職に關する文官高等分限委員会は、五月二十五日午後首相官邸で開かれ、満場一致で休職処分が可決された。理由は「瀧川教授の根本思想はマルクス主義を多分に取り入れており、刑法各論の内乱罪、姦通罪などに関し刑罰否定的立場をとつており、わが

国の家族制度ならびに公の秩序を害することはなほだしい」というものであった。現在からすると実にたわいない理由であるが、時代の右傾化の中では、これが正論とされたのである。京大事件は最終的に七教授（佐々木惣一・宮本英雄・森口繁治・末川博・瀧川幸辰・恒藤恭・田村徳治）の抗議の辞任で終わった。辞任教授の中に一高南寮十番で同室だった恒藤恭がいたことを、矢内原忠雄は新聞報道で知り、感慨を深くする。忠雄は恒藤恭が事件にふれて書いた文章のいくつかを読んでいたに違いない。恒藤恭の京大事件についての当時の文章を発表順に示すなら、以下のようである。

- ① 「瀧川事件の経過から見た大学自治の問題」『帝国大学新聞』一九三三年六月五日
- ② 「京大問題について」『東京朝日新聞』一九三三年六月二八日
（三〇日）
- ③ 「死して生きる途」『改造』一九三三年七月一日
- ④ 「或る京大学生に送る書信」『改造』一九三三年八月一日
- ⑤ 「総長と教授と学生大衆」『文藝春秋』一九三三年八月一日
- ⑥ 「京大問題の種々相」『読売新聞』一九三三年九月六日
- ⑦ 「京大問題を記念するために」『日の出新聞（夕刊）』一九三三年九月一〇日

右の①などは、忠雄が当時しばしば寄稿した『帝国大学新聞』であるから、目につかないことはなかった。また、『改造』は彼の愛読雑誌の一つで、評判になった③の「死して生きる途」など、読まないことはあり得なかつたはずだ。彼は後述する南洋群島調査旅行

寸前の忙しい中、この一文を読んだとしたい。

恒藤恭の「死して生きる途」は、京大事件の最中に書かれたものである。『改造』の小特集「京大事件の真相と批判」に載った。官憲の介入による伏字の多い文章である。伏字は十一カ所にも及ぶ。検閲制度による伏字は、大正期の芥川龍之介の「將軍」（『改造』一九三二）などのばあい、×××××で示され、何字が伏せられたのがわかったが、昭和のこの時期になると……で示されるに過ぎず、長短はある程度わかるものの、何字が省略されたかはわからない。一九三三（昭和八）年には、内務省の検閲もこのように度を越したものとなっていたのである。後述するところだが、矢内原忠雄もまた、この検閲という言論弾圧によって、多大な被害を被った表現者の一人として記憶されるのである。

恒藤恭は「死して生きる途」で、瀧川幸辰の論を弁護する。「刑法学上の理論は、私の専攻する法理学の立場にとつて多大の関心に値ひするものであるから、年来私は瀧川教授の刑法学上の論文や著述を興味深く読んでゐる」と恒藤恭は言い、「同氏の見解は、社会の健全なる進歩発達をねがふ熱烈なる精神にみちあふれてこそ居れ、その中から、わが国体と相容れざるやうな思想を見出すことは、全く不可能の事に属する」と断言する。さらに「政府の……（この間何字か伏字）圧迫が暴風のごとく襲ひ来つたとき、学園の平和を熱愛する者も、起つて大学の本質の擁護のために抗争せざるを得なかつた」と言う。タイトルの「死して生きる途」に関しては、以下のように書いている。

大学教授としての職を去ることが、真に大学教授として行動

する所以であるとは、矛盾であつて、矛盾でない。外部から
 …………… (この間何字か伏字) 大学の本質が否定さ
 れようとすると、大学は進んで死することによつて自己の真
 の生命に生きる途をえらぶ外はない。西田幾多郎博士がわが京
 大の講演においてしばしば力説されたやうに、死することによ
 つて生きるの、実に実践の根本義ではあるまいか。

西田幾多郎から示唆されたという「死して生きる途」には、新カ
 ント派の哲学が、そしてキリストの生涯が反映されている。かつて
 恒藤恭をとらえたキリスト教は、苦難の中で彼の指針となる。彼の
 心には聖書のことばが生きていた。矢内原忠雄はそれを見抜く。時
 代の波に抗して生きるかつての友人に、忠雄は便りを書く暇はな
 かったが、心中で拍手を送っていた。けれども、反動の高波は、忠
 雄自身にも押し寄せていたのである。

- 注1 美濃部亮吉「矢内原先生」『矢内原忠雄全集』月報10、のち南原繁・大内兵衛・
 黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、
 一九六八年八月三日収録。八一ページ
- 2 矢内原忠雄「私の歩んできた道」東京大学出版会、一九五八年三月三一日。
 のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。三六〇―三七七ページ
- 3 注2に同じ。三七七ページ
- 4 葉 栄鐘「矢内原先生と台湾」『矢内原忠雄全集』月報26、南原繁・大内兵衛・
 黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、
 一九六八年八月三日収録。一〇三ページ
- 5 若林正文編『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』岩波現代文庫 学術62、

岩波書店、二〇〇一年八月一七日

- 6 中村勝巳「矢内原忠雄と経済学」『内村鑑三と矢内原忠雄』リポポート、
 一九八一年一月三〇日。一三二―二四五ページ
- 7 大内兵衛「赤い落日―矢内原忠雄君の一生」『世界』一九六二年三月一日。の
 ち「高い山―人物アルバム」岩波書店、一九六三年一月一日収録。一一二―
 一三三ページ。南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠
 雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。三二―二四ページ
- 8 注2に同じ。三七七ページ
- 9 矢内原忠雄「カルメルは枯る」『永遠の生命』第三号、一九二八年二月一
 日、のち『矢内原忠雄全集』第一四巻収録。二九六―三〇二ページ
- 10 矢内原伊作「矢内原忠雄伝」みすず書房、一九九八年七月三日、四〇〇ペー
 ジ
- 11 矢内原忠雄「教師としての内村先生」『日本聖書雑誌』第五号、一九三〇年五
 月一日、『内村鑑三追憶文集』聖書研究社、一九三二年三月所収。のち『矢内
 原忠雄全集』第二四巻収録。四四〇―四四一ページ
- 12 森有正「内村鑑三―近代日本におけるキリスト教的人間形成の範型―」筑摩
 書房『現代日本文学全集51』一九五八年八月五日。なお、森有正には、別に講
 談社学術文庫版『内村鑑三』一九七六年九月一〇日(初出は『展望』一九五〇
 年二月号)、のち『森有正全集7』筑摩書房、一九七九年二月二五日収録がある。
- 13 正宗白鳥「内村鑑三―如何にいへべきか―」『社会』一九四九年四月一日―五
 月一日、のち『正宗白鳥全集』第二五巻、福武書店収録。一九八四年六月三〇
 日収録。二〇九―二六一ページ
- 14 新保祐司「今、何故内村鑑三か―キリスト教は西洋の宗教ではない―」『別冊
 環⑧内村鑑三1861-1930』藤原書店、二〇一一年一月二〇日。三七―三八ペー
 ジ

- 15 美濃澤亮吉『苦悶するデモクラシー』文藝春秋新社、一九五九年三月一〇日。
一〇九〜一〇〇ページ
- 16 矢内原忠雄「私の人生遍歴」(第五回) N H K放送、一九五八年二月二六日、のち『嘉信』(22―7) 掲載を経て、『人生と自然』東京大学出版会、一九六〇年一〇月二五日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。二四〇ページ
- 17 大塚久雄「矢内原先生における信仰と社会科学」『矢内原忠雄全集』月報16、一九六四年六月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。一二四〜一二五ページ
- 18 家永三郎「日本思想史上の矢内原忠雄と私の接触した矢内原先生」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日。六三三ページ
- 19 関口安義『芥川龍之介新論』翰林書房、二〇〇二年五月二日。第VI、VII章、三八九〜四九四ページ
- 20 中村政則「昭和の開幕」『昭和の歴史第2巻』小学館、一九八二年六月二六日。二一〜二四ページ
- 21 藤井武「近代の戦士内村先生」『旧約と新約』第二二〇号、一九三〇年五六月一日。のち『藤井武全集』第一〇巻、岩波書店、一九七二年二月一五日収録。一八七ページ 22 注2に同じ。四四ページ
- 23 注10に同じ。四一六ページ
- 24 注10に同じ。一〇ページ
- 25 矢内原忠雄「藤井武全集の刊行を終りて」『永遠の生命』第七三三号、一九三二年三月一五日。のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。八三七〜八四一ページ
- 26 矢内原忠雄「匪賊に遭つた話」『通信』創刊号、一九三二年二月、同文が『経友』第20号、一九三二年二月二八日に載る。『私の歩んできた道』東京大学出版会、一九五八年三月三一日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。以下引用は、初出『通信』による。
- 27 矢内原忠雄「思ひ出」『葡萄』第四号、一九三九年一月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一四九ページ
- 28 矢内原忠雄「戦の跡」『嘉信』第八巻第二二号、一九四五年二月。『私の歩んできた道』東京大学出版会、一九五八年三月三一日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一〇四ページ。引用は『嘉信』による。
- 29 関口安義『恒藤恭とその時代』日本エディタースクール出版部、二〇〇二年五月三〇日。二九三〜三〇四ページ
- 受領日 二〇一五年三月二十七日
受理日 二〇一五年六月十日